

Lives
of
British Reformers

Oyo Gyosho

國英
家文華改慶宗
業兄了二耀業
ノ次ハノ二下ノ部

傳記

1700

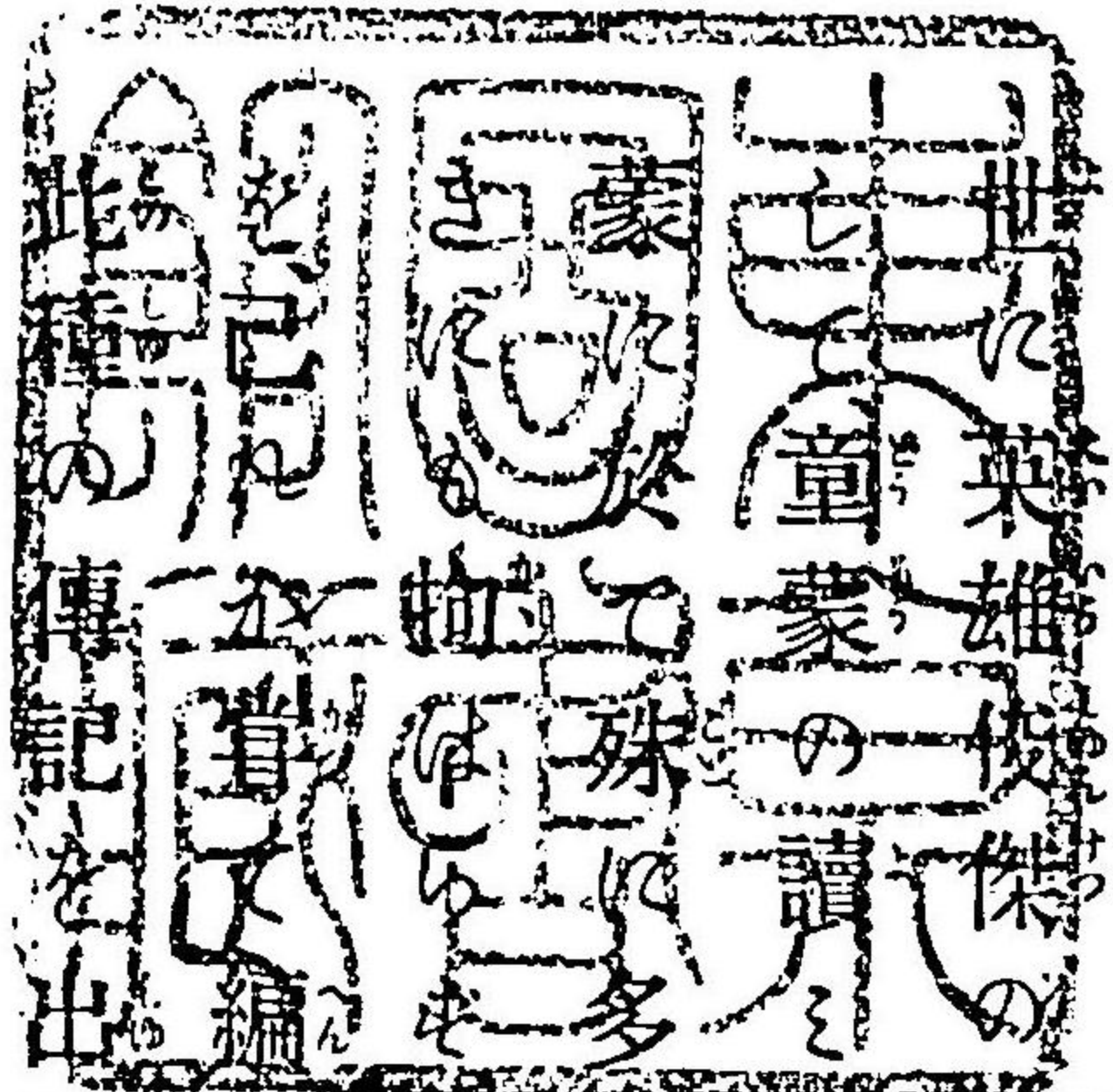
1000

特50
365

W23329
23

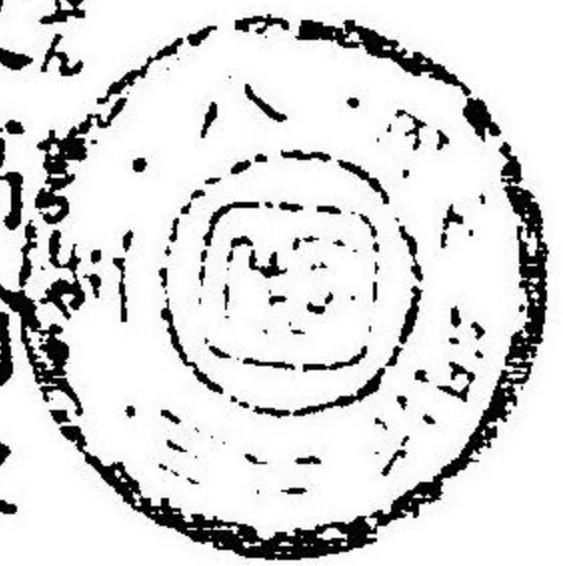
英雄二人兄弟

緒言



世に英雄傑の傳記許多ありと雖も、多くは文高尙に
 ても、童蒙の讀むを得るもの尠し、而して傳記の必要は童
 蒙に於て殊に多きものあり、故に己れ文を綴ること拙
 きに、物に依りて平易を旨とし、精神堅固の鑑たるもの
 を己れに於て、纂て編集せる古今英雄文庫中より選と先づ
 此種の傳記を出版せり

書中の、人、其信仰せる處、説く處、如何は措き、只其眞理と
 認めたることは、堅く信じて、危険困難利慾等の爲之を



改めず、而して之を他に及ぼさんと生命を惜まらず勉む
 るの精神に至ては、世に行はるゝ猫眼主義を奉ぜる浮
 輕の徒を誡め、併せて童蒙に利益する處あらん、讀者幸
 に文の拙きを咎むる勿れ、

明治廿三年四月

著者誌

英雄二人兄弟

岡友漁史纂述



人一度生を此世に得たるうらは誰れか幸福を欲はさるも
 のあらざるは、世の常あれども萬事意の如くならざるは、世の常あれ
 ば能く事毎に意を注ぎ、謹んで事に當り、而して困苦に陥ら
 ざる元、勢の然らしむる處、如何に焦慮せざるも及ば
 ざるは、徒らに思ひ嘆き、落膽せることあらんや、益々不屈の
 精神を振ひ起し、尙進むべきの心得なくしては、此浮世を渡る
 こと適はざるべし、或人は、此世は憂き世あり、苦の娑婆なり
 と嘆けども、之れ此世に生活するの覺悟足らざるに依るな
 り、此理知らざるものなしと雖ども、然も苦難の爲め、心を痛

く惱まし、已れの欲せざることを爲すは、皆免れざることに
 して、能く之れを免るゝものは、則ち大人英傑なり、古今名譽
 富貴を欲ふて、許多の艱難を忍ぶもの少からされども、名譽
 を望まざり、富貴を欲はざり、學識最と深き身を以て、唯一に世人
 の利益の爲め、困苦難澁を忍び、世の誹謗の中に終に残酷の
 死を遂ぐるに至り、毫も悲まざり、憾まざるものは、實に稀にし
 て之れを眞の俊傑英雄と云ふべきあり、斯る人々の例を常
 々心に止め、此世を渡らば、何ぞ憂きとあらんや、何ぞ苦ある
 ことあらんや、實に憂き苦き世あればこそ、却て愉快ある世
 界あらざや

説話、ウィリアム、チンデルは、英國スリムブリッジと稱せ
 る寺領のチンデルス家より出て、幼にして學を好み、夙にチ

ツクスタフナルド大學に入り、常に拔群の評高く、後世必も英
 名を天下に轟かさんとは、誰れ人想はざるものなかりし
 チンデルの大學に入りし頃、壯年なる博識の士あり、名をヤ
 ヨン、コレットと云ひ、辨舌水の流るゝ如く、最もパウロの書
 翰の講義に熟し、爲めに常々衆人を感動せしめ、又聖書を學
 ぶ從來の法方は甚だ無益なりとて、之を改め、専ら其眞意を
 得るの法を勉め、たれば、彼れの講義を聴くものは、自から聖
 書の生ける記者に接するの感ありし、是故に當時の僧侶は、
 コレットの説の新規あるを喜ばせ、又自からに危難の及ば
 んことを憂ひ、漸く之を攻撃するに至りければ、今はコレッ
 トも世に棄られ、無情身と爲り、果ては異端の者と譏らるゝ
 まで、に世の信用を失ひけり

チンデルもコレットの教訓に深く感し、大に悟る處ありて
 常に懐ける説さへも、更めたる程なりき
 借てチンデルは大學に入りてより、經典の智識著しく進歩
 し、其筋の認許も受けを私かに聖書を人々に解き聽かせた
 ること、數々あれば、自然と他より惡みを招きしかば、身の往
 き方に惡かりあんと覺り、此處久戀の地にあらせ一時も早
 くケムブリツの大學へ轉學し、彼の高名ある博士イラス
 マス氏に従ひて希臘語を益々研究せば、之に上越を幸あし
 若か速かに行んにはと、思ひ就ては片時も猶豫ならせ、笈
 を負ひてケムブリツの大學に入學せり
 然るに己が目的の一つは適へども、思ふが儘に成らぬは世
 のならひ、己と説を同じうし、共に事を謀るべき人どては、曉

の星の數にも及はねば、何となく心も引立たせ、快々として
 脩業せり、茲に漸く螢雪の勞を積み何時しか希臘語に熟達
 し、遂に學位を得て公然説教をすることさへ許されたり
 是に於て大學を去り、未だ身を定むるの場合ならねば、グ
 ヲンヤ州のサーヂヨンワルスと云へる人に聘せられ、其子
 供等の教の師とありしが、元よりチンデルの學識もて只子
 供等を教ゆるは、餘りに容易き業あるものから、自と暇を得
 て時に觸れては、其近村を説教しつゝ、巡回し或時は遠くブ
 リストルと云へる市にまでも至りしことありき
 サ、チヨン氏は機り機りに近傍の僧侶を招き響應するこ
 とあれば、チンデルは其都度僧侶に面會し、種々宗教上の大
 問題に付て、己が思ふ處陰れなく論陳し、頻りに當時の弊害

を痛言すると雖も、誰れしも取り合ふものなきのみあら
せ、果ては大にチンデルを厭ひ嫌ふに至りければ、或日サ
チヨンはチンデルに打ち向ひ、足下は學士あり又博く經典
に亘り學の道に優れども、如何にせん未だ大學を出で、程
も亦く、其得る處の年俸は僅かに五拾圓に過ぎざれども、彼
僧侶は老練の博士にして、年俸は五百或は千或は貳千を得
るものぞかし、然るに足下は彼の人々を説き從へんとあそ
は、何事ぞ、誰れか足下を信すべき、宜く考へ回らせよと、諫め
しかども、チンデルは諾ふ氣色更になく、心密かに思ふ様、如
何にしてか彼の僧徒やサ、チヨン氏等に、余が説くところ
のものは、空論井蛙の説あらで、正しく眞實なるを知らしめ
んと、流石博識大度の士も、齡は未だ血氣を超へざれば、心は

無念の陥に充たされ、十方百方熟慮の末遂に一策を得たれ
ば、大に勇み喜べり
其頃博學秀才を以て世に知られ、人の信用厚かりし、博士イ
ラスマス氏の物せし、基督教兵士の書と云へる一の論文を
翻譯し世に公に爲したりき、然るに此策空しからせして、サ
チヨン氏は大に其多識を感し、此れより彼れを侮らざり
し、又傲慢なる僧侶の輩は、心私かに恐服せしとは云へど、斯
る場合の常として、僧侶はチンデルを尊敬するより寧ろ嫉
むに至り、何事に付け駁撃を勉めざるも云ふことなかりき
是に於てチンデルは、愈々宗教の腐敗を極めたるを、痛く憂
ひ、又僧侶の衆生を訓導すべき職に在りながら、迷の烟や惑
の炎に包まれて、逃るゝ術さへ知らぬ衆生の、哀れある境界

英 雄 二 人 兄 弟

に沈みしことを願みせ、神の正道踏み違ひ、少しも耻ぬ有様
を深く嘆き悲めり、チンデルは何があして之を救ひ矯正さ
んど、思を千々に焦まども、身は浮世に棄られて詮もあし、然
はさりあがら此儘に捨て置かば、此後如何なる弊害に落ち
るも知れぬ危急の場合と覺れば、胸も張り裂く如く、身を置
くどころさへ無さままでに、悲みつゝ、世の中は推あへて宗教
の腐敗を知らぬか、それどもに余れが思の誤りかど、涙に袖
をしぼりけり
或時チンデルは、其身の心苦を包みかね、一老僧に物語りけ
れば、件の老僧は聞き了り、最も悟れる面持にて、彼の宗教の
大宰たる羅馬の法王は、眞は基督を信するものあらぬを、足
下は知るや知らざるやと、其語の葉は鳥羽玉の黒白も分ぬ

英 雄 二 人 兄 弟

暗の夜に、不意に炯めく電光の如く、チンデルの心を烈しく
打てけり、思ひもよらぬ、老僧の一言深くチンデルの膽に銘
し、寐ても寤ても忘れぬのみか、彼れの大業を果せしも、亦困
苦に沈みしも、非業の最後を遂げたるも、皆此一言を信せし
に依りしあり
チンデル獨り語る様、以來は必ら老人々に、彼等の厚く歸依
あま法王は、尊み敬ふものあらせ、蓋は眞實に基督を信せざ
るが故なりと、證を立て、國中に、張りわたる迷の雲を吹き拂
ひ、赫々たる白日を見せばやと、眞の理説くどても、今の浮世
の人心容く悟に入り難し、然らば教の源たる聖書を、國語に
翻譯し、文字ある人は之を讀み、神の教の眞理を悟るの便を
興へしことなれば、自然に教も輝き、弊害も何時しか消へて

英 雄 二 人 弟

其の幸福を得るならん、畢竟人の迷に入りて覺らぬは、聖書
が異國の文字もて記され、讀むに適はぬ有様に、乘る利慾
に目のあき僧徒の語るが儘に信する故と、理知れば此事を
果さん心の駒は勇み立ち、止んとせよと、遂に住み
慣れしソトハリを、後として錦織り成せ、ロンドンの都路指
して出立せり
其子細を尋ぬるに、當時ロンドンには有名なるタンステア
ルと云へる、ピショップ役名あり、チンデル此人に身を寄せ
て、自の目的遂げんと思ふより、己れの希臘語に通曉せるこ
とを顯はして、身を寄せるの中立にせんものと、遂に希臘に
名高き演説家アイソクレテズの演説一編を、翻譯して世に
公にせり、是れ千五百二十三年の七月なりき

十

英 雄 二 人 弟

纏てチンデルはロンドン府に來り、指方あるタンステア
ルを訪へども如何に幸あきぞ、思ふ人は中々に心の中を打ち
明けて、身の目的を達せんには便りなきのみか、最も冷情人
なれば、左あがら暗夜の途に迷ふたる旅人の便る燭失ひし
に異あらず、チンデル尙も落膽したりける、然れどもチンデ
ルは、其心様正しく、其目的邪からず、世の爲には身を棄つる
も惜まぬ、眞の英雄なれば、又思ひ反しては、獨り言、神は余れ
ど共にあり、神は全智全能にして、其仁愛は限りあらず、此孤を
憐れみて、必ず保護を垂れ給はん、勉めよ、神の子と自ら
心勵ませり
或時チンデルはセント、ダスタンス、インセイウエストに於
て説教せしが、是ぞ彼れが常々信して疑はぬ神の仁惠を給

ふ術からん、今日も今日とて、チンデルの説教を聞かばや、其
 多の人の来りし其内に、土地で名高き豪商のハンフレド、モ
 シマウスと云へる人あり最も心正直にして能く神に事へ
 仁あり義ある性質なれば、チンデルの説教に感し、其學識の
 常からぬを深く賞賛し、若しも要むることあらば及ばさ
 がら助力せんと、彼れの意中を察したる、最も頼母しき言葉
 を聞き、飛立つチンデルは、渡に舟を得し心地して、思ふあ
 らまし物語り、早速モンマウスの食客となりける程にモン
 マウスは厚く之を養せり
 抑も此モンマウスと云へる人は、嘗て羅馬及びエルサレム
 等の地を遊歴せしことあり、又現今の宗教の腐敗を極め弊
 害の見るに忍べぬ事共を、已に悟り大に宗教改革を望める

ものからチンデルの身に取りては百万の味方を得しに異
 ならずし
 チンデル或時モンマウスに打ち向ひ、仁愛なるモンマウス
 よ、余は之れ厚く足下の懐抱受け、何に不自由さき今日なれ
 ども、過つる時足下に語りし余が目的は、如何に工夫を回ら
 せども、到底此ロンドン府に在ては果すことも適はせ、左
 とて別に是ぞと云ふ名案も出ぬ目下の有様、足下に若しも
 思ふよとあらば、訓して給べと、云ふを聞くよりモンマウス
 最も氣の毒氣に左候實に世は全く濁り果て、垢を嘗て毫も
 誹とせせ、眞理を聞くも用ゆるものどて一人もなく、反て之
 を誹謗する罪惡漲る世の中なれば、今此處に目的遂んとま
 るは、直ち釣もて魚を釣んとするに異ちせ、勞して功なき

は理の當然、寧ろ國を去り、他郷に身を寄せ、靜かに考へ、變ら
しなば、又目的を果せ、へき機會もあらん、速かに故郷を慕ふ
福を絶ち、知らぬ他邦に事を成せ、之れ何よりの良策ならん
と、親切面に顯して語れば、ナンデル膝をはたき、打ち、實に足
下の言はるゝ如し、速かに足下の忠告に従ひ申さんと、感涙
に咽びつゝ、モンマウスに謝し、諺にも善は急げとある程に
早や早や出發せさんと、其旅仕度する暇さへ、憐れなる同胞
兄弟の迷に沈めるを、救はんため、思へば惜まれて、モンマ
ウスに訣別を告ぐるも、そうく、之れぞと定めぬ旅の空
辰巳を指て飛ぶ鳥の後を慕ひ出發せり、
纏てハンホルグに到着し、一と先此處に足を止めたり、此地
は獨逸國の一港にして、其本國を去ること遠ければ、己が目

的果をには、少も氣遣ひなかりければ、之れより、汝々と聖書
の翻譯に従事し、晝はひも夜はよも、ながら、小部屋の内
に籠りつゝ、骨身を碎ひての勉強に、僅か一と歳を経るや、經
ざる其内に、早新約聖書を譯し了り、今は印刷に付するほか
りに、おりにけり、實に其功の大なる進歩の速かざるは、驚く
べし、
ナンデルは、希臘語聖書を譯し、傍ら「バルゲト」上、羅句語
キ、譯獨逸語聖書及エラスマス譯羅句語聖書等を參考と
せしとは、雖ども、彼のツイツクリツの如くに、バルゲト上
聖書を原本と爲せしに、あらざるなり、
ナンデルは、未だ微塵も他力を假らさずして、真に一個單立、此
翻譯に従事し、覺悟の事とは、云ひながら、許多の困苦艱難に、

選ぶと雖も生みの命の語なる、聖書の正しき譯本を、自國の人々に與へんと、思ふ一念片時も緩まを奮勵爲しければ、神も深く慰れみ助けてや、遂に斯る大業を、僅かの月日に果したる、借て翻譯成りしかば、早々に出版せんと思ふに就け、事の中途に故障等起りては、千日の勞も空しくあるのみ、故郷の人の不幸さへ救ふを得ざるに至る故、生中の印刷者に委託して、後日に臍を噛む憂を避んため、良印刷者を索めんと又出版せし後は之を安全に本國へ輸入せざれば甲斐なしと茲に又々ナンデルは心を大に痛めけり、ナンデル豫て國を去る際に、モンマウスに預けたる金あれば、之を取り寄せ印刷の費金に充てんと其由を、委細に認め彼れに送りければ、金は直ちに到着せり、是に於てナンデル

はナンデルを去りコロンドンと云へる地に移り、此處に出張せんと爲したるも、機會悪く、當時日耳曼に農民一揆起り、コロソンの土地も之が爲め、大に騷擾し、人々業に安せざれば、此大業を首尾能く遂ぐるは覺束なくぞ見へたれども、ナンデル塞む之に意を注がも、一心不亂に従事せしかば、萬事都合宜しきを得、先づ馬太傳の一卷は出版を果したり、然れども其本國たる英國に於ては、誰れ人之を知るものなかりし、然るに意外なるかな、不幸ある哉、コロソンの議院は、此出版を差止むる旨ナンデルに達したり、ナンデルは不得已、又も此地を去りて他に隠れ場を、索めざるを得ざるの場合と成れり、抑も此不幸の原因を尋ねるに、當時コロソにドテックと名付くる一人の僧ありし、彼れは彼の農民一揆のため、其故郷

其の故、選せられ、此地に流浪し來り、著述を以て、今日の業と
 せしが、其常々、委託せる印刷者は、則ちチンブルの聖書印刷
 を引き請けたるもの其人なりし、斯る事情のあるが故、何時
 しか、リチツムは、チンブルの英語聖書を出版し、密かに英國
 を輸入して、國中にルイサト主義を傳播せんとの企あるを
 悉く成る職工より聞き傳へ、チンブルの是れ迄苦心あした
 るを、思ひ遣る事もあげなる舉動もて、此由急かに流言した
 ればこそ、コロン議院より印刷禁止の命出たるあり、リチ
 ツムは、又英王ヘンリー八世に上書して、チンブル譯の聖書
 は甚だ危険にして、宜しく、人民の之に感はさることに、注意
 を要せしと陳告せり、斯の如くなれば、チンブルは自から大に
 困難の位置に沈みたり、然れども、チンブルは是れまで

思ひ込みたる一大事を如何で茲に斷念をべきぞ、
 思は、堅き鉄石の、チンブル今はせんかたかく、私かに聖書の
 譯稿を、荷ふて來、因河を溯り、ウチルムと云へる地に逃れ、永
 の苦心も空しからせ、漸く此處に其効の顯はれて、英語聖書
 の出版は、めでたく成就を告げたりけり、此印刷を爲したる
 人は、ヒレター、マヨエツファと云ひ、頃は千五百二十六年の
 秋、
 是れより先き、チンブルの、コロンに在りし時は、聖書を出版
 せるに當り、其欄外に注解を付すべきの見込みありしが、
 チンブルに來りし後は、之を改め、唯聖書の末尾に、讀者へ充た
 る演舌書を添たるのみ、一も注解様ものを加ふることを
 其、
 又、其形さへ小とせり、

話轉て、英國に於ては、今にも「タンブル」の新約聖書來りもせ
 ば、如何に之を防がんかと、僧侶は恰も天地潰裂の珠に、接
 したるが如く、皆人心あさまでに、懼れ憂ひ腦を搾り智を盡
 し防禦の計策思らざりし、然るに新譯の聖書は、左あがら洪
水の堤を破り平押しに、盜れかゝるが如くにて、障へと防げ
 と効驗あく、勢込んで進入し、都會は勿論僻邑まで殘も限あ
 く蔓延せり、
 是に於て、國王も遂に嚴かなる令を發し、新入聖書は見當り
 次第都て之を燒き棄つべし、又之を賣買とべからせと命じ
 けり、彼の「ウツステール」は、不平の小兒と云へる書著して
 「タンブル」の聖書を信するの誤あることを論し、或は「セ」
 「ウツステール」に於て説教して曰へる様「タンブル」の事

書には三千有餘の誤認あることを發見せり、故に之を信す
 る時は其危きこと大なりと、然りと雖ども、防禦の策は皆破
 れ却て益々聖書輸入の勢を強めけり、
 斯くて、新入の聖書は嚴重に探索せられ、得るに従ひ燒き棄
 られ、又「ビショップ」役名侶ノ等は、熱心に聖書を買締め、之を燒
 き盡さんと、骨を砂利と勞めたれども、其甲斐もなく、聖書は
 愈々賣れ高の増加の爲めに、益々供給を促し、絶へせ盡させ
 せ、國中に輸入し來る故、ビショップ等は一方に向ては、之を
 買締め、他に向ては、此書を信するの危険極めて畏るべきを
 舌を爛し聲を涸らし、演説訓諭せる其有様は、實に狂るが
 如くありし、然れども、聖書を販賣するものは、日一日と増し、
 政府の禁を犯し、危険を顧みず、之を買ふもの益々加はる、

利大とあるのみ如何に防ぐも皆徒勞に歸せり嗚呼彼等は
何者ぞ勢のこゝに至るは人力ならで神の業と悟らき之を
防がんとするは恰も一握の土もて千丈の堤を破壊し來る
洪水を障へ止めんとするに何ぞ異あらん是を思へば彼等
の愚も亦極まれりと云ふべきのみ今はヒヨコツア等も到
底防ぎ難きを察し眞に落膽失望せり
始め新約聖書の輸入せらるゝや此書は何人の手に成りし
か知るものあかりしが後幾何もあふして遂にチンブルの
業なるて世に知られたればチンブルも今は枕を高くし
て眠り能はき爲りける故速かにウチルムを去り暫ら
遁せんとマキボムルと呼べる地に逃走せりチンブル此地

に於ては人々の保護を受け漸く安堵の身となれり
抑も此マキボムルは英國よりウイランボルに赴き街邊
にして英國を脱走し彼の日耳曼の宗教改革の大家を訪は
んと來る者多く過るものから自然チンブルは其人々又屢
々會遇し故郷の景況を傳へ聞く機會を得たるを喜べり
彼の蘇國の宗教改革大家の一人パトリックハミルトンの
如きケムブリッヂの宗教改革者の一人ハアンスの如き又
チンブルが嘗てロンドンに在りし時懇意を通じ互ひの意
中を語り合ひし親友フリスの如き皆此地に在りしと云ふ
チンブルは斯る隠遁の身なれども徒らに月日を送るゝと
はあく常々出版の術に依り種々の著述もて本國の人々を
教訓せり其ウチルムに在りしや羅馬書の手引と云ふ書

を著はし、ルイサと等しく、羅馬書の大主眼たる、信仰に因
て義とせらるゝ、どの教義を公に爲し、又マルボッ少に在て
は、不義の財の噓及基督教徒の義務と云へる、共に名高き書
を著はし、甲に於ては重りに信仰に因て義とせらるゝ、どの教
義を説き、乙を以ては重りに國王と臣民又僧侶と世人との
間に生る相互の義務如何を論じ共に世に阿らき、危險を
恐れ、大膽もて、宗教の腐敗を唱へて世を戒めたり、此等の
書類も、讀むと英國に輸入せられ、其國中に傳布するに従ひ
人心大に感動し、悟を得るもの少からざりき、マソンド説て
曰く、夫れ國に王たるものは、其國に於て至高至尊たり、僧侶
の如きは、都て國法に従ふものにして、今日の如く、法律の上
に立つべきものにあらず、又英語聖書の如きは、則ち人が神

を信するの實際の規準たるものなれば、全く自由も都ての
人の見るべきものにして、何ぞヒヨッス等の彼れ是れ、マソ
ンドの聖書は、蔓延流布し、遂に九重の宮中に入、王后
アンボレンの手に觸れしが、アンボレンは深く之れに意を
注ぎ、其重要の章句には、國法を付したる程に、熟讀せり、然る
に不思議にも、アンボレン王も亦之れを聞讀して、曰く、此書は
余一人のみならず、國家に王たるもの、宜しく一讀すべきも
のありと、社會の有様、斯くの如くあれば、自から英國の宗教
改革を大に促むに至りけり、アンボレン王の御手、マソ
ンドの初巻五卷出來しなれば、速かに之を撰む、出版せしむ思ふ

英 雄 二 人 兄 弟

其費金は、悉しければ、是が金策を帯び、置成出版物を其
 國へ輸入せん計畫をうね、アムステルダムに向ひ出立せり、鹿
アムトワールは、其頃日耳曼と英國との商業上中心にして、
 大に隆盛の地なりし、アムステルダムに滞在せる内、
 圖らざりき一人の英國のピョットに出會せり、
 此ピョットは、アムステルダムが、嘗てロンドンに在りし頃、其身
 を寄せて自らの目的遂んど、たよりし其時に、事を左右に托
 しつゝ、アムステルダムを助けもせせ、利さへ之れを遠けし、情知ら
 老のアムステルダムと云へる人ありき、然るに此度新譯の聖
 書は勿論、かりそめにも宗教改革に因みある書籍は、悉く購
 ひ歸り、燒き棄て、永く英國にかゝる書跡を絶んの計案も
 て、遙々此地に來りしかり、嗚呼、愚ある哉、彼れば、最も惡しと

英 雄 二 人 兄 弟

思ふアムステルダムの目的を亡はせ最良の方法と喜ひつゝ、多額
 の金圓携へて、故ら他邦に書を探め、金なきために出版者爲
 しがたく、已に自滅に及ばん、アムステルダムの著書を購ひ、彼れに
 企業の資金を得せしめたりとは、アムステルダムの所爲元よ
 り正道ならざれば、如何に名策あらばとて、必き成功あらざ
 るべし、然りと雖ども、滔々たる天下、豈に獨り、アムステルダム
 のみならんや、
アムステルダムは、思はせも、敵より資金を得て、アムステルダムに歸り
 千五百三拾年一月の十七日を以て、漸く舊約聖書の都五卷
 を出版せり、此書は新約聖書よりは一層に注意し、種々の圖
 書を挿し、挿み、且毎卷の末尾には、注意書を付し、又當時の價
 値が眞義を誤さずし條項には、其關外挿點標を施し、註解を

英 雄 二 人 兄 弟

加へるも、當時の弊害を明示せ、大に世の注意を促せり。夫れ斯の如ければ、此書も亦安全に行はるべき筈も亦、怒ちレヨツナ等の罪を犯すところとなり、得るに従ひ焼き棄ずれ、人民は之れを讀むを嚴禁せられたり、嗚呼、神に従はざるもの、所爲、斯く迄頑愚あるか、前には新約聖書の輸入を防がんと、百方手を盡せども、其功驗とては露程もあかりしに尙も懲りて同じ手段に出づるとは、千五百三十年の末つかた、チンデルは又も僧侶の實行と、云へる書を著はして曰く、英國のビシヨツナ等は、魔道に全く陥りしか、一國に羅馬の法王のみに敬服し、國王を輕蔑し、法王あるを知らず、國王あるを知らず、國の爲め、人の爲めに事を計らば、無考にも、各自の利慾か、左なくんば法王の利益のため

英 雄 二 人 兄 弟

めに、勤むるのみ、之れを何と云ん、天に於ては、神意に逆らひ、地に於ては、臣民の道に違ふ、其罪實に輕からざり、苛酷極めて論じたれば、此適實銳利の論鋒には、反對者も戰慄當ること、能はざり見へたりけり。千五百三十一年、チンデルは、マルボルグよりアンナツに居を移し、爾來此地に常住せり、是れ此市には多くの勇俠ある印刷者あり、又法律等も、都てチンデルに、安全と保護とを與へたりし故あらん。他郷漂流の孤客、チンデルが、此地に移りしより、幾程もなくして、其身を圍める多くの危険は、春の雪、暫時の暇に消へ失せて、暖風徐るに襟を拂ふの時節とこそありにけり、當時本國に於ては、首相ウラルモ、死して、政府の方針も稍や更ま

り、宗教改革派の士人に對する壓制も、漸く緩みたり。或時英國政府は、殊に命を傳へて、ナンデルの歸國を促した。り、ナンデルは常々慕ひ懐しと思ふ故郷に、歸へることにし。あれば、天にも登る心地して、悦ばぬにあらざれども、今日が日まで、極めて仇を爲したる僧徒は、譬ひ、政府の方針は變れども、替らぬ彼等の勢力もて、隙に乗じて國王に、如何ある議を入るゝやも、知れぬ危き此時に、歸國して、未だ盡さぬ我が思却て妨げ受るなら、是れまで忍びし困難辛苦も、水の泡、容易に、歸國爲し難しと、余れに問ひ、我れに答へて、心の紐弛めぬ堅固の、ナンデルの許に來りし使者の名は、ステファン、ボグムと云ひ、心最と高尙にして、自から賢士の風采ある、丈夫なりし。

ボグムは、親しくナンデルに面會し、其容貌を覗ふに、俊傑の氣質備はり、能く困苦に耐ゆるの勇あり、久く其親屬朋友に離れ、慣れぬ他郷の孤客となり、饑渴に身を苦め、艱苦に心腦まじ、已れを忘れて、國人に、眞の幸福得させんと日夜心を盡せるは、語りも聞きもせぬ内に、早くも察し知られた。ボグムハ、心に思ふ様、人は已れの利のため、自から招ける困難さへ、かまら恨めるものなるに、身に犯せる咎は、露程もあく、人のためとて、斯くばかり忍耐強く、今日までも節を枉けぬ、ナンデルの心の内は、如何あらん、只嘆賞の外あしと、切りに慕ふ心を生じたり。

ナンデルはボグムに云へる様、賢明ある我國王、若し人民に聖書を讀むの自由を許し給はらば、余れを措きて他に、王の

英 雄 二 人 兄 弟

御心に適はせたる者をして、聖書を翻譯せしめ給ふとも、勿論拒む處あらざらんば余は筆硯を捨て、決して今後は一句だに、復た筆を取らざるべし、而して一刻も猶豫せざり直ちに歸國し、王の階下に身を投じ、如何なる困苦を被ひるも、否死せざるも、更々恨みとせざるべし、若しも余が願の聽かれれば、再び歸國せざる念あらじと、始終を聞きたるボグハムは、一々感し、只管チンデルの廉潔大度あるを賛賞して見へたりける、ボグハムは委細を了承し、難て歸國の上、王に云々復命しければ、王は之れを悦ばせ、更に他の使者を遣はし、チンデルを捕へ來るべき旨命したり

是に於てチンデルは早くも其身の危きを察し、暫らく不トワープを逃れ去りし、程もあらず事の静まりに因り、再

英 雄 二 人 兄 弟

び歸り後遂に捕縛とあるまで、此處に止まれり

夫れ斯くの如くチンデルの喜悅は雲と散り霧と消へ、忽ち憂の身となりければ、勇氣は毫も衰へ、益々振ひ起つ、絶へて著述をもて、國人の幸福を計りて、餘念なかりけり

又チンデルは舊約聖書のヨナ書を譯し、當時の通弊を諷諫し、續て約翰書及基督の山上の説教の注解を著せり

千五百三十二年、同じ宗教改革派の名士にして、親友あるフリネは英國に歸りしか、間もあらず執へられ、遂に死刑に處せられし、其始めチンデルはフリネの歸國の危険を察し、書翰を彼れに送り、熱心に忠告して云へる、機親愛あるフリネよ、都て事の秘密なるものは、之を表示せざ、黙するに若かき、又捨て置さ、難き大事あらば、勉めて之れを論議せし、余は斯

英 雄 二 人 兄 弟

肉體微弱されども、靈魂は決して然らざり。余は世に悪まれば棄られたる者なれども、余の盡きへき本分は、勉めて盡き志らじ。若しも神の前に出づるの時こそ來りおぼ。余は此世に在りし其間、一として己が良心に背きつゝ、神の御語變じ事は勿論世の富貴、榮譽ども、望みし事はさらにはなき、眞必陳べく憚らざらん。

然るに壯年ある改革家フリスは、英國に歸りしや否。フリスの誠めたる点に於て、斗らず反對者の烈怒に觸れ、罪を得て、悲むべし獄に下されたり。彼れ若しフリスの忠告に従ひしなら、斯る不幸に陥らざりしを、如何せん彼の忠告書フリスが許りに到達せしは、時に後れたれば、其懇切も空しかりしを遺憾あり。

英 雄 二 人 兄 弟

フリスはフリスの捕はれしを聞き、大に歎息したりしかやがて復た一書を送りて云へる様、余か愛するフリスよ、足下は万事を放棄して、最と仁愛ある天父と、最と懇切ある主とに、身を任かまべし。決して足下を恐喝するものを畏るゝ勿れ、又甘言を云ふ者に依る勿れ、只身を任かまべきは約束に眞實ある、語に偽りなき、神あるのみぞかし。足下の茲に至りしは、福音の爲めならせや、勇氣を持ってよ。此時こそ、豫て主基督が教へ給ひし場合あり、足下に苦痛を與ふるものは、其昔主基督を苦しめし、同じ悪魔の所爲なれば、我等は之れに服従して、豈に可あらんや、勇めよ、恐れ、未來の大なる神の賜ものこそ、實に望むべきものぞかし。主基督は死をばさし身よ、不死の身とありしを、死を記し、主基督の奉らるる

英 雄 二 人 兄 弟

時は、不死の身となり得べし古より幸ある復活を、希望し
肉體を、困苦の中に潔く棄てし英雄の例を思ひ習ふべし
足下の良心を清くして、必せ汚まこと勿れ、又足下の身を滅
亡に導くまこと勿れ、夫れ忍耐は、眞の救助を得るものあるを
知らん、足下若し苛責の苦痛に耐へざれば、天父に祈り願ふ
べし、神の語に、我れの名をもて願ふ處のものは、都て我れ之
を與へんと、あるを知るならん、神は必せ足下の苦痛を、救ひ
若くは之れを短うめ給はんと、實に信切ある慰を送りしと
は云へど、此書のフリッスが許に達せし頃は、彼れ未だ存命あ
りしや否や、確かあらざりし、然れども餘人はいざしらせ、
リッスに於ては、何ぞ人の慰を要そべきや、其死刑に臨める時
は心氣毫も亂れせ、平心自若、愈々堅き信仰もて、遂に刑台の

英 雄 二 人 兄 弟

露とぞは、おりにけり
抑も此フリッスと云へる人は、英國ケンツ州の一旅店の子に
して、其稚き頃より、學の道に志厚きのみならず、智識は衆に
優りければ、彼れを知るものは、向來必せしも、天下に博學秀
才の名を轟かさんと最と頼母しく思ひき、フリッスは若年に
してケムブリッヅのキングス大學を卒業し、漸く其英名を
天下に知られ、又當時の首相ウチルセルの厚き信用受けし
程ありしか、其ロンドンに在りし頃、圖らせもナンデルに出
會し、彼れの教訓に深く感し、爾後聖經の研究に心を傾けた
るに、始めて悟る宗教の腐敗と弊害、フリッスは之れを正し救
はん、種々に力を盡せしより、遂に其頃の法として身は囚
人の辱めを被むりしか、雲時して放免とあり、再々浮世に出

英 雄 二 人 兄 弟

たれど、尙も思は増まばかり、此憂き有様を徒らに見過さる
とは耐へ難し、然は然りなから改革の業を爲さんとせれば
果しもせぬ内には、や捕縛とならん、然らば碌々ど月日を
らんか、いさく、丈夫の心許さぬ生活なれば、寧ろ國を去る
に若かさるべしと、フリスは詮方盡き果て、飽かぬ故郷を
つかしき親屬朋友を後として、是非も泣泣セルマンの國を
指してぞ出發し、遂にマルボルグに着きにけり
借てフリスは國を出てより、益々宗教上の智識は發達し、其
思ふ處は憚からず、書に著はしては國人の迷を、醒さんと心
を盡し身の困苦、忘れて久しく忍びける程に、此頃は幸ある
哉、愛らしき故郷の花を、詠め得ん世の有様とありければ、
是は再び故山に歸る由を、ナンデルに言ひ遣し、其身は英

英 雄 二 人 兄 弟

國に歸り、リデーイングと云へる地に赴きしや、忽ち無籍者
と認められ、嚴き手械足械に身は不自由とありたれども、程
も亦く救ふ人のありて、此處を逃れ密かにロンドン府に行
きしに身を隠し、暇も亦く遂に發覺し復、固圍に繋がれたり
然るにフリスを看守する人は、實に信切にして、時々は
スが其友人を訪ることを、許しける、其頃ロンドンに豪商ベ
ナットと云へる人ありて、大にフリスを信し、フリスも懇ろ
に交はりし程に、禁錮中數々ベナットの門を叩けることあ
りければ、ベナットは新教派の者共を、密かに補くるとて、嫌
疑を受け、遂に獄に下されしが、病を得て間も亦く、歸らぬ旅
の人となれり、然る程に世は新教を嫌忌して止まされば、
是は歸國の誤を悔ひ、行末如何あらんかと安き心はなか

英雄二人兄弟

りけり... 或時友人フリスの許に來り、晩餐の禮典に就て其説を知ら
んと、只管教を乞ふて止まざれば、フリスは危険の事と知り
あがり、不得已自ら厚く信せる説を記して與へたり、當時
ロンドンにウイリアム、ホールとて、情も道理も知らぬ小人
ありしか、其外面は眞しやかに新教を厚く賛成し、親しく新
教派の士人に交りて、遂に彼のフリスの晩餐説の寫本を得
て、之れを密告せり、是れぞフリスか果あき最後を遂くるの
原因とは、後にこそ知られたり、
斯る密告ありしに因り、フリスは愈々許多のヒシヨツブ等
の目前に引き出されて、信仰の裁判受くることあり、或時
其裁判を開かるべき、クロイドンと云へる地へ、招喚せられ

英雄二人兄弟

は、如何に想ひしか、此裁判に於ては、フリスは
到底言解く方便もあらざるあり、假令ひ其陳述せる事は、眞
理なるにもせよ、斯る濁世のあじさき、身の安全は望みて
も、適はぬこそ是非あし、
一名の紳士、押丁を従へて、フリスをクロイドンに送らんと
彼れを伴ひ、フリスに向ひ、テムス河を舟行しける途中、
彼の紳士は、熟々フリスノ身の上を哀み、噫世には薄命なる
もの、フリスの如き人あるか、一は天性に依るとは、唯ども亦
幼き時より、學の道に入り、永の年月困苦を忍びし甲斐あり
て、學才は衆に秀て名聲も世に普ねく知られし身を以て、其
説の世に容れられざるより、忌はしき縲繼の辱かしめに遇
ひ、年又此に危険なる裁判受くるとは、其妻や子は如何にか

り、悲み嘆かんと心の中、推しはかられて慙れあり、實に水の流
 れど、人の身は知れぬこそ是非あけれど、口には云はねど、心
 の中思はせ、涙に咽ひけり、
 彼の紳士は、フリスに向ひ、足下は眞に學博くして、智深し、誰
 れ人、足下を敬はざらん、然るに頑赤にも、自からの説を主張
 し、世に達らひ給ふぞ、若しも足下にして説を改め、其金を止
 めんに、は必き咎めあらせして、却て幸福の身とならん、彼の
 晩餐の事に付き、余は詳かに知らねども、聖經の教ゆる處は、
 或は彼れにあらせ是れなりと、或は是れにあらせ彼れあり
 と、互に論辨駁撃するとも、其真意こそ、何れにあるや、是れ皆
 人々の考へ如何に、依るものならん、故に若し神の前に出た
 なら、今日の是も非とあらん、正も亦誤とあらんも、知れざる

べしと云ひければ、フリスは之を聞き、語る様、足下は然る程
 に云ひつれど、余は晩餐の説に就ては、飽くまでも世に反對
 する者あり、余の説は今日悟り得るものなく世に棄らるゝ
 のみか罪せらるゝとも、今より二三十年を、經たることなれ
 ば、必き余が説の誤りあらぬを悟られん、余は余の説のため
 如何に此身は成り行くとも、何ぞ恐るゝ事あらん、元より決
 心せる處なりと
 續て舟は、フリスに着ければ、三人は徒にて、
 しで行きけるに、紳士はフリスを慙れむの情は、尙も盛にし
 て、何があ救ひ與へんと、思ふも道理、今フリスか裁判の席に
 就かは、死刑に處せらるゝは必定なり、彼れを救ふはクリス
 トシに達せぬ内と、心せくまゝ、フリスを途中より逃し遣ら

んど彼の押丁を、良き程に云ひ解きて、フリスを救ふの方便
を語ら合はせることの由、フリスは何時しか聞き取りて、紳士
は云へる様、實に足下が夫れまで、余を救はんと心を備ま
し給ふ信義の萬分の一をも、謝するに語あけれども、深く思
を回らさば、余の此有様に陥りしも、皆之れ天命定まれるに
依る、若し此場を逃れたりとせむも、直ちに追手のため、捕へ
らるゝは必定あり、然らば耻辱の上の耻辱あり、事ろクロー
イツに至り、潔く裁判受けて、是非あくも罪に定めらるゝと
も、余は説を改め、自から信せる事共は憚りなく、論辨して
止まんのみと、動かぬ心の覺悟こそ、實に嘆賞の至りなむ、
借てフリスは裁判の席に出て、當時有名なる許多の僧侶、神
學者の詰問、烈く受けたりしが、一々之を辯解し、尙も種々に

真理を説きたれども、元より迷の霧に包まれて、眞の光を見る
目あきのみか、深く悪みを含みたる人々を、對手のこときれ
ば、何程舌の根絶ゆるまで、説けども、其甲斐もあく、果ては異
端邪道の者と、罪せられ、火刑の宣告受けたれば、心ある人々
は、其裁判の不正なる、其刑罰の残酷なるを、唱へざるものあ
かりけり
時しも千五百三十三年七月の四日、フリスは其處刑場なる
スミスフィールドと云ふ處へ引き行かれ、設けの杭に繋ぐれ
無残なるか、生かからぬ程に閉ぢられ、火烙に包まれ、慄れ
果あき死を遂げり、其苦痛の程は、中々に記さるも、愚か想像に
も、及ばぬことありき、嗚呼彼れフリスの信仰は大あり、嗚呼
惜むべし、廉潔遺鑑の士已に逝けり、茲に感賞して止まざる

英 雄 二 人 兄 弟

一話あり、其頃アンドリニエウイットと云へる青年あり、身は裁縫師の雇人ありしが、フリスの説を深く信しける程に遂に火刑の罪に陥されて、フリスと並び生きがら、一塊の灰と、最も悲き最後を遂げし事ありき。斯る残忍苛酷の事實を、今日に於て聞く時は、誰れしも信じ難き迄、古の壓制大ありしを忌はしけれ。話轉つて、チンデルは、始め新約聖書を翻譯するや、倉卒にして之れを成したれば、若し神余れに時を與へ給はんには、他日必き之れを校正せしむと心に誓ひしが、身は常に危難の内、内に圍まれて安き筆取る暇とては、寸時もあらず。なれば、心は實に遣る瀬なく、快からぬ月日を送りける。左りあかち、何時まで斯くて、あるへきにあらず。明日にも非道の縛に

英 雄 二 人 兄 弟

かゝるも知れぬ身、暫らくも賭ふ時に非ざれば、餘事を棄て彼の校正に着手し、食を忘れて勉めし程に、千五百三十四年十一月成功せり。此校正の新約聖書は實に前譯中の足らざるを補ひ等して、精く訂正を加へたれば、其原本たる希臘語聖書と、分厘も違ふことなきまで完全せり。嗚呼、英語聖書を用ゆるものは、擧てチンデルの此大業を記して、深く其恩を謝せざるべからざるあり。然れどもチンデルは、尙之れに満足せず、再び之れを訂正し、千五百三十五年第二校正聖書成し、雖ども悲むべし。世に公とあらざる内、已にチンデルは縛に就けり。斯る事情あれば、此書後に出版せられしとは、雖ども著者の監督なきが爲め、却て第一校正聖書に劣りしことを、惜むべきあり。

抑もチンデルの縛に就くや、其模様如何は詳かに傳はらざれば、記述に由さけれども、反對者の計略に陥りしに由るは疑ひもあさきことあらん

當時チンデルは曾て本國に在りし時、已れか抱へ主ありしツルヌスの親戚にてトーマス、ポインズと云へる人に、隠匿れ少しく安き身ありしが、偶々英僧ヘンリー、フィリップなるものに欺かれ、ポインズの不在の間に只獨り、其安全ある家を出でたりき、是ぞ彼れの運の盡き、敵は準備整ひて今にも來らば、紐らんと腕を擦り縛を解き待つとは、神あらぬ身の露知らき、チンデルは門を出るや、忽ちに慈悲もあさけもあらぬ細の身はいましめとありにけり

此事餘りに突然あれば、ポインズ家内の人々も、誰れあつて

知らざりしに、其筋より官吏出張しチンデルの書籍はいふもさらき、一切の文書を悉く沒收せり、茲に始めてチンデルの捕縛の事實判然せしかば、其知己親友は痛く悲み、左から父母を失ふたる如く、嘆息せざるものあかりし、中にはチンデルの無罪を言ひ立て、速かに縛の苦み免してと、請願あまもの數多あれども、一向に採用せられ見へたりけり

ポインズは分けて能くチンデルの性質品行を知りつる故に、悲憫の情に耐へ難きのみか、斯る正直純潔の士を、若しも罪を犯すことあれば、政府は汚名を万世の末まで傳へ流まらぬ、彼れの爲め是れの爲めと心を碎き、時の權門に傳手あるを幸に、事情を陳べ條理を解きて、チンデルの放免を懇願させ、其甲斐もあさけなや、彼のフィリップある者のため、罪を

き身を以て遂に囚はれ、ナンデルと等しく異端の者と認められしを是非あけれ
借てナンデルは、千五百三十五年降るみ降らきみ五月雨の晴るを待たる、其頃、捕へられてより久しく絶へて取調あかりし、そは政府に於てはナンデルを免さんか罪せんか何れに決しかねたれば、彼れの物せし都ての書を、羅馬に送り諸の神學博士に鑑定せしめ、而して之れか處置を定めんと、彼の神學士等に讀み得る爲め、ナンデルの書を、悉く羅句語にぞ譯しける、斯る事情なれば何時しか一と歳を過ぎたりき
然るにナンデルが主張せし人は信仰に因て義とせらるるとの教義及其他の説は、都て信仰の條項に反するものなりと

鑑定せられたれば、ナンデルは之れに、服さき一々辨駁切論し、而して久しくルンペン大學の神學博士等と、互に討論止まざりしか、果ては強て異端者と認められたるこそ非道あり、然は然りあがら濁世の中にも、往々に真理を悟るものなきにあらざ、ナンデルの論辨教義を、聞き極め、深く感激せしものも少からざりし、彼の囚人ナンデルの看守人、並ひに其女を始め、家族の人々は共に悟りて、其信仰を改めたりしと云ふ
ナンデル獄屋に幽囚せられたる、其間の苦難は今更陳べんと、それと中々に盡くし得ざれば筆擱かぬ、口碑に依ればナンデル獄中にて舊約聖書の翻譯を、殆んど結了し、アントワ
トアの友人デヨン、ロシヤあるものに送りしと、或は然らん

か
頃は千五百三十九年十月六日、悲むべしナンドルは死刑の
宣告を受け、刑場に誘はれしが元より覺悟のことなれば、何
かは恐れ驚かん、自若として動せず、謹みて神に祈て曰らく
神よ願はくば國王の眼を開かせ給へど、語終るや静々と刑
臺に登りし様は、露程も平素に變らぬ眞實の、英傑とこそ、感
賞するの外なかりき
雖て絞罪に處せられ、其骸は火中に投せられ、遂に一塊の灰
燼とぞなりにけり、嗚呼眞正の英傑已に去れり、彼れの屍は
灰と化し、跡を世に止めざるも、今に残れる紀念の碑は、吾人
をして其昔を追想感激せしむ、然れども之れ一の金石紀念
碑のみ、其地に至らざれば見るを得ず、年所を経れば從て破

壊せん、之れに反して一世の困苦を以て作りし彼れの英傑
聖書こそ、年経る毎に馥郁たる馨も、美々たる實も、共に榮へ
て百歳千歳の末までも、神の道を教へつゝ、限りもあらぬ幸
福を與ふる眞の紀念あり

英雄二人兄弟大尾

明治二十三年四月廿六日印刷
明治二十三年四月三十日出版

(正價金拾貳錢)

編輯兼
我乃者

京橋區南傳馬町二丁目三番地

江尻 統三

印刷人

京橋區元數寄屋町壹丁目壹番地

内藤 祐

發賣所

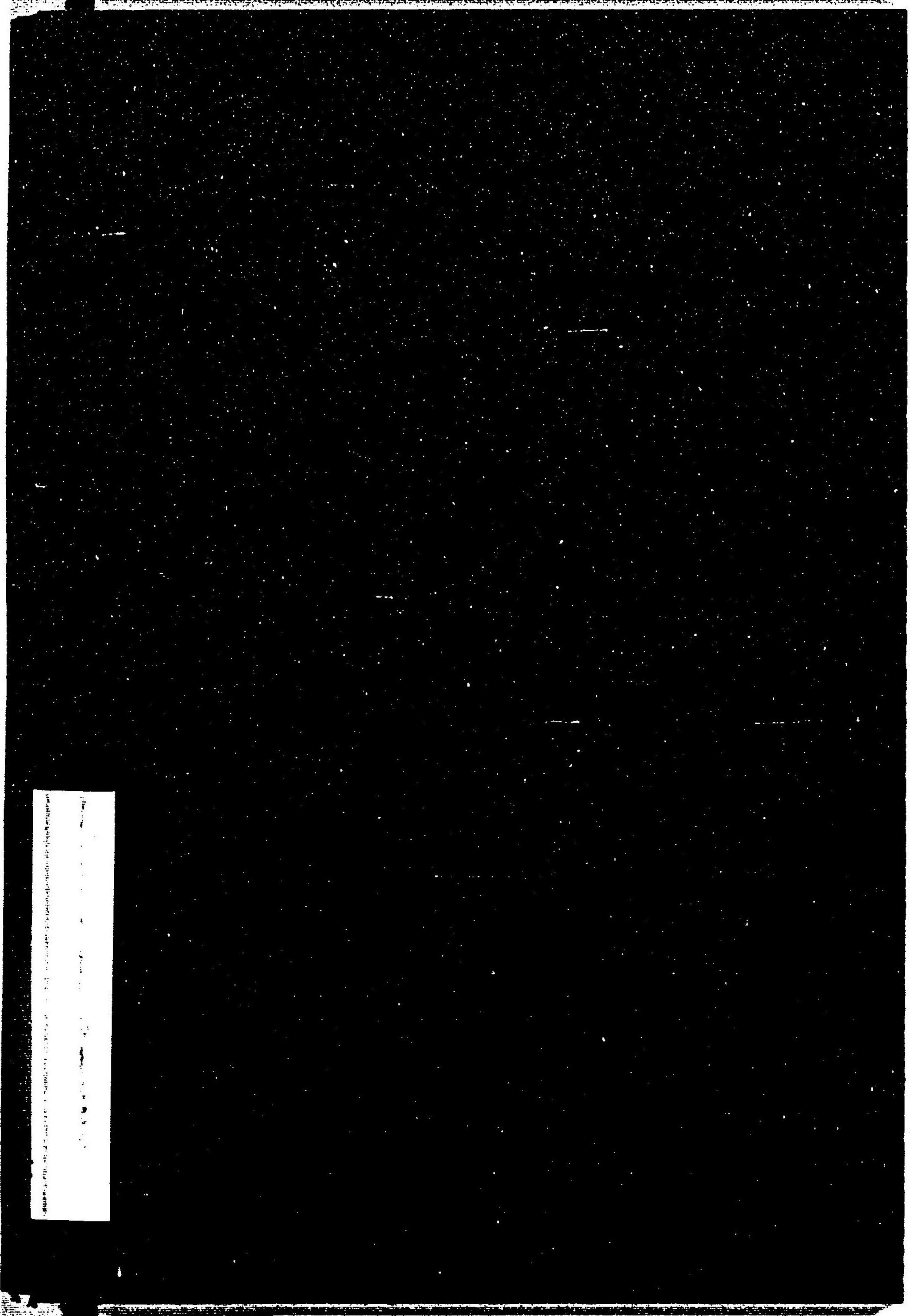
東京銀座三丁目二番地

十字屋書店

6

東京	警羅社	仙臺	大塚書店
神田	十字屋	名古屋	藤丸書店
各築地	雜書會社	上州	文江堂
地大坂	福音社	全	報告堂
賣全	濟生堂	松井田	畑中七郎
捌西京	文港堂	安中	茂木喜平
所全	<small>クリスチャンホード</small>	富岡	木田書店
神戶	福音舎	高崎	煥乎堂
静岡	米山定昌	伊勢崎	服部書店





Small, illegible text or markings located in the bottom-left corner of the dark area.

特50

365

英雄二人兄弟

国立国会図書館

020276-000-5

特50-365

英雄二人兄弟

鷗 友漁史 / 著

M23

ABI-0081



4500

365